

1. 指導計画の見直しを行い、保育内容の充実を図る

<取り組み状況>

- ・教育課程の見直しを行い、年間カリキュラムとの照らし合わせをした。本園の特色が各学年、各季節に遊びや活動として取り入れられているか確認をし、3学年の連続性を見直した。
- ・前年度の指導計画を元に期ごとの子どもの姿を振り返って見直しを行い、各学年の状況や課題を報告し検討した。
- ・2年目となる満3歳児保育（4年保育）は、保護者のニーズに応え人数を増やし実施した。昨年とは変わらず4月～7月生まれで定員数に達し、満3歳児保育の年齢（育ち）に合わせた生活や流れ、遊びや活動を安全面に十分配慮しながら保育した。
- ・今年度より、保育室に掲示する子どもの誕生日表に、園内で飼育しているミニブタ、ウサギ、チャボの誕生日を表記した。子どもが保育の中で目にすることで、幼稚園の仲間として意識が高まった。また、6月にはウサギが病気で亡くなった。『お別れ会』を通して、哀しい出来事ではあったが、命について考える機会となった。
- ・7月の夏祭りに「もったいないばあさん音頭」を全園児で踊った。歌詞が資源の無駄使いや食べ残しを減らすなど、地球環境に優しい生活を考える内容となっており、園児も生活の中で「もったいない」を考え、意識して行動する姿が見られた。今後もこうした視覚教材を研究し取り入れていきたい。
- ・小規模保育事業「まめっこくらぶ」「まめっこ」、また未就園児教室「おひさまクラブ」の未就園児が幼稚園生活に円滑に移行できるよう、情報共有をし、引き継ぎを行った。また小規模保育事業、未就園児教室、満3歳児保育の保育計画を照らし合わせ、それぞれのカリキュラムの充実を図った。
- ・今年度、両親共に外国籍の（言語や食事面に対応を要する）子どもが入園した。異なる文化を園と保護者双方が歩み寄って理解に努め、子どもも他の園児も共に安心感をもって楽しい園生活を過ごせるように取り組んだ。また、教師が子どもの性別や国籍、身体的特徴、家庭環境など個々の特性を十分に理解したうえで、遊びや活動において、子どもが互いの違いを分かり合える関係が築けるように教師間で意見を交換したり、研修に参加したり、多様性に留意した保育に努めている。

◇食育

- ・子どもたちが栽培して収穫したものを自分の手で調理する楽しさや喜びを感じられるように、保育計画を考え実行することができた。
- ・管理栄養士は、園生活の実態を把握するために子どもの生活に入り、実際の姿を見たり聞いたりしたことを給食のメニューや調理方法に生かすことができた。
- ・管理栄養士が食育として、牛乳や魚などの食材のもつ力や食事における咀嚼の大切さを写真やパペットを利用して子どもにわかりやすく話をした。こうした食育活動と共に、子どもたちが給食を食べて、使用している食べものについて考えたり、実際にその食べものに触れたりすることで、食への興味・関心を高める機会となった。
- ・5年振りに希望者を対象に給食試食会を実施した。試食だけではなく、本園で大切にしている「たのしくたべる」重要性を伝え、家庭でも実践できる取り組みについて話をした。保護者からは、「子どもの気持ちに寄り添い、楽しい食事を心掛けていきたい」等の感想が寄せられ、趣旨が伝わり家庭との共通理解に繋がった。

◇地域交流

- ・南隣にある老人ホーム「青蓮荘」とは、月に一度、園から施設を訪問し施設内や駐車場を利用してダンスや歌を披露する交流会を行っている。季節によっては、感染症の増加などで交流を見合わせるが、園児からの製作物を送るなどをして交流を継続している。また、青蓮荘から入園式や卒園式の手作りのお祝いメッセージを贈っていたいただき、双方にとって優しさや思いやる気持ちが感じられる交流が継続できた。

<今後に取り組むべき課題>

- ・教育課程と幼稚園教育要領を照らし合わせ、5領域の偏りがないか見直しを行うとともにより理解を深め、日々の保育を検証する。
- ・満3歳児保育（4年保育）は3年保育の保育計画をもとに保育を行っているが、今後は本園独自の満3歳児の保育計画を数年かけて作成していきたい。今後も4年保育での入園を希望される方が増えてくることが予想されるので、園全体の園児数や教員数等を加味し、安全安心な保育が実施できるよう検討していく。
- ・管理栄養士と各学年の担任が連携してカリキュラムの食育内容を見直し、更に計画的に活動を行う。そして、豊かな食の体験を積み重ね、楽しく食べる体験を通して健康で、より良い成長、発達を促していきたい。
- ・園児の発達の特性や国籍、家庭環境の多様化もあり、子どもたちが共に学び育つ場として、教師が保護者と十分に連携を図り、教師間で協議しながらインクルーシブ教育に柔軟に対応していく。
- ・地球温暖化に伴い異常気象が常態化し、その影響は幼稚園生活にも及んでいる。特に気温の上昇による熱中症対策は深刻で、屋外活動の機会が減少し、行動制限が余儀なくされている。こうした背景から、年間行事の開催時期や内容の見直しを検討していく。

2. 教師の育成に努める

<取り組み状況>

- ・講師を招き、「子どもの主体的な遊びの中からの学びを探る（考える）」というテーマで研修を行った。環境構成や子どもの理解、保育内容や指導助言のあり方について学ぶ機会となった。
- ・子どもの理解や保護者の対応について臨床心理士と話す機会や研修会を実施し保育に生かした。
- ・ECEQ（イーセック：公開保育を活用した幼児教育の質向上システム）を含む、他園の公開保育に積極的に参加した。参加後、公開園の様子や意見交換の内容を発表する園内研修会を実施し、自園での活かし方を検討し教職員で共有した。
- ・教員のキャリアアップのため、年15時間程度の研修受講を目標にし、その積み重ねで修了要件が満たせるよう各自の自覚の元、自分に必要な内容の研修を受講した。
- ・育児休業を終え、時短勤務中及び通常時間勤務に戻る時期の教員に対して、少しでも負担なく継続した勤務ができるようにサポートを行なった。また、時短勤務であっても担任業務に復帰できるように、フリー教員を増員したり業務の軽減を行なった。
- ・内定者を迎え、内定者研修を実施した。内定者の就業への不安や負担を軽減することを目的に研修日数を減らしたり、仕事内容を細分化したことで、指導教員の負担軽減にも繋がった。
- ・教職員のワークライフバランスの実現と長期継続勤務が可能となるよう職場環境の改善や残業の削減に努め、教職員と学園の相互理解を図ると共に、有給休暇取得の充実に取り組んだ（正職員、契約社員、パート勤務職員）また、育児休業取得者の増加に伴い、子育てと仕事の両立を支援して復帰しやすい環境を整えた。
- ・就業規則や諸規定の改定を行い、教職員の有給休暇、育児・介護中の時短勤務や休暇の充実を図ることで働きやすい環境を整備し、教職員の健康と労働意欲の向上を目指した。これにより、教育の質の向上にも寄与することを期待する。
- ・養成校（大学・短期大学）からの教育実習生については、学生一人ひとりに合わせた指導に努め、実習生の指導方法や問題点の改善方法等を担当教師間で話し合い、有意義な実習を経験できるよう努めた。
- ・今後の教員採用に繋がるように養成校を訪問したり、就職説明会や就職フェアへ積極的に参加し、就職ナビサイトへの登録も行った。また就職見学説明会も実施し、本園の教育PR活動に努めた。

<今後に取り組むべき課題>

- ・継続して園内研修で取り組んできた「子どもの主体的な遊びの中からの学びを探る（考える）」というテーマで、令和7年度に公開保育を実施する予定。本園の保育を教育関係者の方に見ていただき、評価を受け、今後の保育に生かしていきたい。公開保育に向け、例年以上に計画的に園内研修を取り入れ、まずは環境構成の見直し、意見交換や意識の向上を目指し実践していく。
- ・年次有給休暇の日数及び平日の有給休暇取得可能日数を増やし、教職員のワークライフバランスの実現に努めてきたことで、結婚出産を経て継続した勤務を望む教員が複数できた。現在の課題として、育児休業を明けて復帰する際に、様々なサポート体制を実施しているが、実際は一部の教員に負担がかかっていたり、本人は周りに気を遣いながら勤務することが多い。見えてきた課題を少しずつ改善し、全職員がそれぞれの力を発揮して保育が楽しめるよう検討していく。
- ・新卒採用者を迎え、教員の業務は多岐にわたる為、一つ一つ丁寧に正しく身につけていけるよう業務を制限しながら経験を重ねていく。先輩教員が状況を確認しながら、ゆつくりと育成していく。

3. 防災・安全意識を高める

<取り組み状況>

- ・年間の災害・防災訓練実施計画を立て、毎月の安全の日には様々な災害を想定した避難訓練を行い、子どもたちに命を守ることの大切さや防災意識を指導した。教職員は訓練の実施状況を受けて、気づきや反省を生かして災害マニュアルを見直し、教職員間の周知徹底を図った。
- ・今年度も職員間で通園バス置き去り防止安全装置の使用法の周知徹底を図り、子どもたちも毎学期の訓練を実施した。また、登園時の出席確認と連絡のない不登園児の状況確認の徹底、そして活動ごとに子どもの人数の確認を担当につく教職員間で正確に行ない、置き去り等事故の防止に努めた。
- ・前年度のケガの状況を考慮し、新入園児が園生活に慣れていない時期の自由活動では危険度の高い遊具や場所を一部規制し、早い時期に子どもたちに安全教育と安全指導を行った。また園内でケガや事故が起きた際には、原因を究明して改善点を出し合い、それに伴う環境整備を行った。
- ・４月に守口市門真市消防組合本部警備課の協力で救命救急講習会を受講したり、消火訓練を行った。また１１月に４歳児が消防署施設見学、１２月には５歳児音楽鑑賞会（守口門真幼年消防クラブの活動の一環として）に参加し、防火意識が向上した。
- ・大阪府門真警察署及び大阪府警察本部交通安全教育班に訪問していただき、５月には４・５歳児対象の交通安全指導、２月には就学前の５歳児を対象に徒歩通学についての安全指導を受けた。
- ・施設や園庭など毎年の設備点検を実施し、ケガ防止のため園庭の土や柵の木トンネル周辺の衝撃緩和マットの入れ替えを行った。またヤッホーの砦の老朽化に伴い、土台の修繕工事を行ない安全性を高めた。
- ・能登半島地震の募金活動を行事の都度積極的に行い、災害復興を願った。また大地震の発生に備え、毎年の備蓄品点検に加え、必要物資を買い揃え災害時に備え危機管理体制を強化した。

<今後に取り組むべき課題>

- ・いろいろな時間帯、場所を想定した避難訓練を実施し防災意識を高めていく。今後は、バス内での避難訓練等も想定して実施していきたい。
- ・園舎と共に園庭の整地や遊具においても総点検を行い、必要に応じて補修、改善を行い、安全に留意していく。
- ・これまでは医療機関の受診を要したケガのみ事故報告書を記載していたが、そこまでには至らなかったインシデント事案も教職員に周知を図り、記録に残し、時間や場所、年齢、事由等を分析して教職員で共有し、再発防止のための対策を講じる。また、ヒヤリハット事案も同様に行う。

4. 保健・衛生管理に努める

<取り組み状況>

- ・子どもたちの健康状態を観察し、異変や疾病の疑いが見受けられる場合はすぐに保護者に連絡をとり、医療機関の受診を勧めた。また、毎月「ほけんだより」を発行し、保護者に留意すべき事項を知らせると共に、感染症による欠席者が出た場合には通知し、蔓延の防止に努めた。
- ・夏季の気温上昇に伴い熱中症の危機管理意識を一層高め、園児や教職員の健康被害につながらないように黒球熱中症指数計で毎日測定を行い、暑さ指数の高い日は戸外遊びの時間や内容を考慮したり、自由活動中にも休憩時間を設け水分補給に努めた。また、エアコンを適切に使用しながらの室内温度管理、経口補水液の準備等の取り組みを行った。
- ・視力検査で子どもの視力異常が見つかり、視力矯正のため眼鏡を着用する子どもが増えた。今後も視力のみに限らず検査の結果をもとに子どもたちの健康状況を見守っていく。
- ・食物アレルギーの対応について、給食・おやつ提供におけるマニュアルの再点検、安全提供システムの確認、保護者説明会の実施、毎月の給食だよりの保護者確認を管理栄養士、アレルギー担当教師、担任、給食調理員で徹底して行っている。また、給食調理員と教師が話し合える場を設け、互いの問題点や工夫点、改善したい点等を出し合い、より良い給食になるよう共通理解を図った。また他の施設の食べ物による窒息やアレルギーの誤食事案の報道がある度に、園内でも同じような事故が起こらないよう対策を行い、検討を重ねている。□
- ・園児が感染症に罹患した際、治癒後に登園許可書の提出を求めているが、コロナ、インフルエンザに感染した場合は、保護者が医師から受けた指示をもとに登園許可願いを書いて提出するようになった。今後も感染症に対する情報収集と知識の向上に努めながら、保護者との共通理解を図り子どもたちの安全や健康を守るために必要なことをその都度実施していく。
- ・動物を飼育する園として、動物の健康維持と園児・教職員を含む人的影響を回避するための飼育動物のワクチン接種や動物病院の獣医と連携し情報収集に努める。鳥インフルエンザや豚インフルエンザについても外部情報を取り入れ、安全管理に努める。
- ・鶴見区保健福祉課（子育て支援）による４歳児訪問事業に賛同し、今年度は「だいいだいいどこだ？」の大型絵本を保健師の方に読み聞かせしていただいた。プライベートパーツや自分の体の大切を知る機会となった。
- ・子どもたちの個々のプライバシーの保護や落ち着いて過ごせる空間の確保、また保育環境のさらなる充実を目的として、年長保育室２室にカーテンを設置した。

<今後に取り組むべき課題>

- ・最近視力検査で異常が見られ、弱視や遠視、乱視が見つかるケースが増えている。そういったことから子どもの健康診断（内科、尿、歯科、心電図、耳鼻科、視力）により医療機関を受診した結果を取りまとめ、医師の見解を加えて全保護者に「ほけんだより」等で発進し、健康に一層関心をもってもらえるように努める。
- ・熱中症については注意すべき期間が長くなってきているため、引き続き最重要課題とし令和６年度同様に対策を講じ、健康被害ないように努める。また、行事活動の時期や内容の見直しも行う。

5. 家庭との連携を深め、子育て支援の充実を図る

<取り組み状況>

- ・子どもの園での様子や援助、指導の状況を保護者に伝えると共に、家庭での様子を聞いて情報交換を行った。個人記録を多面的（興味関心・人間関係・言葉・生活など）にとることを心掛け、子どもの長所や課題について共通理解をし、保護者との連携を高めるように努めた。
- ・発達の特性から担任だけでは安全で適切な保育が難しいと判断した場合、保護者へ協力を求め特別支援の申請を行い、加配(※)の教職員を配置した。（※加配とは、通常の配置基準に加えて教職員を配置すること）
- ・卒園児へのアンケート調査を行い、集計結果を家庭（１年生と在園児）に配布した。アンケートから分析できる保護者の思いや幼稚園への要望は本園の教育を見直す貴重な意見となった。
- ・在園児、卒園児保護者の子育て体験やメッセージを掲載した機関紙「ひがしっ子」（39号）を発行した。
- ・キンダーカウンセリングとして、臨床心理士のカウンセリング日を月１回設け、１２月には希望者を対象に「子育てミニ学習&おしゃべり会」を開催した。日頃の子育てについての不安や困りごとを気軽に話したり保護者同士で共感したり、有意義な会となった。
- ・未就園児教室「おひさまクラブ」は、今年度も２歳児は通年の週２回コース・１クラス、週１回コース・２クラスを実施した。子どもの特性を理解して保育できるよう事前に親子登園日を設け、子どもの遊んでいる姿を見ながら日常の様子聞き取り等を行った。教員の情報収集と子ども理解だけでなく、保護者にとっても安心感につながった。また９月からは、１歳児の親子参加コースを、２週に１回実施し、親子で幼稚園での遊びや体験を楽しみ、保護者同士の交流の場になっている。
- ・未就園児教室「おひさまクラブ」では、参加する未就園児の家庭教育の難しさや様子に合わせたカリキュラムや活動内容の見直しを行った。保護者の要望で実施した給食の提供は、未就園児の自立につながる経験となり、入園後の園生活がスムーズに送れることになった。
- ・未就園児向け幼稚園開放「あそびのひろば」を月一回程度平日の保育中と土曜日に開催した。時間内で「幼稚園見学会」も実施し、保護者の子どもの発達や入園についての相談に応じる場として定着している。また地域園庭開放「にこにこパーク」も開催し、在園児や卒園児、地域の方に親子で遊ぶ場の提供ができた。
- ・１月中旬にTBSテレビ「ミステリーブルーネッツ」の番組にて、卒園児霜降り明星せいやさんが出演。幼稚園時代の記憶を辿る企画にて取材を受け放映。１月下旬にテレビ大阪「誰も知らんキング」の企画にて大阪府下園児が多いマンモス幼稚園ランキング第４位に選出され、取材を受け放映された。反響として、テレビをきっかけに幼稚園見学を希望する方もいた。これからは内容を十分に吟味したうえで、また幼稚園のPR活動につながることも期待し、メディアの取材依頼にも応じていく。
- ・ホームページの園児保護者向けのトピックス「ひがしっ子ブログ」では、教師や管理栄養士など園職員が交代で保育や活動の様子を文章と写真を添えて週に２回更新し、日常的に園の様子が保護者に伝わるようにしている。

<今後に取り組むべき課題>

- ・子どもの発達状況や特性、援助配慮の視点や課題などの共通理解を深めるために、日々の連絡帳や電話連絡、個人懇談などを積極的に実施していく。また、保護者と共に子どもも理解を深め、双方が個々に合わせた援助や配慮ができるよう、連携を大切にして信頼関係を築いていく。
- ・子どもを取り巻く様々な家庭の状況を把握したうえで、担任や教職員は子どもや保護者の継続した経過観察に務め、関係機関との連携を図る。
- ・未就園児教室「おひさまクラブ」では、未就園児がいる家庭への子育ての支援の場の提供や、その後の園児獲得につながるよう子育て教室・ベビークラス（マタニティー・０歳児対象）の新設についても計画していく。

6. 幼小連携の充実を図る

<取り組み状況>

- ・ 門真市公私立幼稚園協議会による保護者向け講演会が開催され、小学校1年生の担任経験のある先生が講師となって、「就学にあたっての保護者の不安軽減」をテーマに講話をされた。事前に全保護者を対象に「1年生に上がるまでの家庭生活」や「小学校生活」に関する質問をアンケートで募ったところ、多くの不安や疑問が寄せられ、就学前の保護者の心境がよく表れていた。園では、行事で来園した年長組保護者に対し、寄せられた質問とそれに対する講師の回答を伝える機会を設けた。また、入学までに家庭でできることとして、登下校の道を一緒に歩いて安全を確認することや、親子の会話を増やし「話す・聞く力」を育てること、興味をもったタイミングで一緒に本を読んだり自由に書く経験を積むことなどを発信した。
- ・ 近隣校との連絡会で就学児の様子や入学までに身に付けたいことを共有し、保護者にも情報を発信した。2月には近隣校の協力で5歳児が小学校見学を行い、授業や特別教室を見て入学への期待を高めた。
- ・ 近隣中学校とのふれあい体験を実施し、園児との関わりを通して中学生には幼い子を思いやる優しさや関わりを学び、自分自身の成長を振り返り周囲の人への感謝等、様々な気持ちを抱く機会となった。また、園児には憧れや刺激を得る貴重な時間となった。
- ・ 今年度はコロナ禍以降5年振りに門真市立二島小学校5年生とのもちつき交流会が再開できた。小学生を招いて園児と一緒にもちつきを行い、コマ回しや書初め、凧揚げ等の伝統遊びも楽しむことができ、双方において有意義な時間を過ごせたので、今後も継続していけるよう小学校との連携を図っていきたい。
- ・ 支援対象児及び、小学校入学後に支援が必要と感じられる子どもの保護者とは、懇談を重ねて共通理解を図ると共に、必要に応じて小学校と連携を取り、安心して入学できるよう対応している。
- ・ 年度修了時には卒園児の幼稚園指導要録抄本を進学する小学校に送付した。一人ひとりの特性や配慮点などの引継ぎ（来園、小学校へ訪問、電話等）も行った。また、市の教育委員会や小学校からの要望により、1学期末頃から進学予定児の確認や園生活の様子を見学に来られることも多くなっている。
- ・ 近隣小学校の運動会に招かれ、卒園児の応援に伺った。卒園児の様子を知るきっかけとなり、また卒園児やその保護者との再会で卒園後の繋がりも感じてもらうことができた。こうした小学校との関わりを今後も大切にしていきたい。
- ・ 卒園児アンケートの集計結果を元に、本園の課題について見直しや改善を行った。

<今後に取り組むべき課題>

- ・ 卒園児アンケートを行い、その結果を幼稚園と家庭の共通理解に繋げる。また過去6年のアンケート結果を比較し、昨今の傾向を分析する。それを教師間で共通理解し、改善を行っていく。
- ・ 参観や交流会、卒園児の保護者から得た小学校の流れやルールを教師が理解し、必要なことは年長児の幼稚園生活に反映できるように努める。
- ・ 門真市保幼小かけはしプログラムの一貫として、保幼小連絡会及び研修会等に積極的に参加し連携に努めていく。

Ⅲ. 学校関係者評価委員による意見

<学校関係者評価委員> 学識経験者、評議員、保護者 計13名

今年も、細心の注意を払いながら様々な取り組みが行われているからこそ、保育のクオリティーや安心安全な運営ができていると感じられる。令和5年度の学校評価をしっかりと受け継いで明確化されており、さらに良くなったと言えると思う。卒園児保護者アンケートからは教師への信頼や感謝が見受けられたこと、また教育理念の中にも非認知能力や個別最適化なども盛り込まれていて、改めて素晴らしいと感じた。その他、食育への新しい取り組みや外国人の子どもの学びと多様性についても掘り下げておられるとのこと、今後も視野を広くもっと教育にあたっていただきたいと願っている。